

『職場の教養』より抜粋

苦手への対応

- ・ 誰にでも相性の良し悪しは、あるものです。でも相性の悪さを相手のせいに行っている限り、互いの関係は、よくなる。原因は、自分にあるということを見ずは、考えてみる事です。
- さらに
- ・ 自分の非を反省し、これまで形は、どうあれ関係が、続いてきたことに感謝しつつ、相手への好意を唱えてから、交渉してみる事です。
- ・ 他者との関係が、悪化した時、原因を相手に求めている限り、相互の関係は進展しません。他者を尊重して、＜自分にも非がある＞と受け止めて自己を切り替えることで、関係は良好なものになっていくものです。

終わりを美しく / 朝が、弱く、いつも時間ギリギリの出勤 / 「部屋の後始末は、できているのか」とのアドバイスを受けた。

- アドバイス後

- ・ 就寝前に必ず部屋の片づけを行ない、整理整頓ができた状態で床につくように努めました。後始末をし、しまりのある生活を積み重ねることで、生活にリズムが、生まれるようになり、寝坊を克服することができたのです。
- 今では、
- ・ 目覚ましがなくても、起きたい時間に自然と目が覚めるようになり、何より仕事が、はかどるようになった。
- ・ 一日の終わりを美しく、ケジメのある生活で自らを律し、仕事に臨んで行きましょう。

向かい風 / 向かい風でもヨットは、進んでいる。 / 斜め四十五度でジグザグに進んでいく。 / 逆風を利用して、前に進むことができる。

- ・ 人生には、追い風もあれば向かい風の時もあります。
その風をどう読み、どのように努力するかで人は進歩していくものです。

人を変えようとする前に / 上司と部下のベクトル合わせ

- ・ < こういう会社になりたい > < 社員にこうなってほしい > という希望が、あるならまず上にたつ人が、その希望通り動いてみせることです。
- ・ 「ありがとう」が言える素直な社員に育ててほしいければ、日頃から部下に対して

「ありがとう」と声をかけることです。

- トイレ掃除を始めた社長

- ・ <そのうち社員も手伝うだろう>と思いながら続けていましたが、誰も手伝おうとしません。
- ・ 先ず、自分が実行しようと実行、二年が経ち、自分にやらせようという気持ちが無くなった頃、社員の一人が、手伝い始めました。
今では、皆が競って清掃するようになった。

・ 真理は、新しくも古いものです。「率先垂範」はいつの時代も生きています。
勝負脳 / 日本大学大学院教授・脳外科医・林成之氏 / オシム元監督を救った「脳低温療法」 / 北京オリンピック日本代表競泳陣に伝授・大きな成果（北島康介他）

- ・ 林氏は以前、救命救急センターで十一年間指揮をとっていました。
連日連夜、生死をさ迷う患者を治療し、自分やスタッフの体力が極限に達した時、前向きな言葉をかけることで、限界を超えた力が出ることに気づいた。
- ・ 脳の機能を活かして、最高の力を発揮させるためには、「前向きな姿勢と明るい性格」が、必要であると氏は語ります。
できない、やれないなどの否定的な言葉を使わずに、プラス思考で仕事に取り組んでみましょう。

・ 学歴と学力

- ・ ソニ - 創業者の一人である盛田昭夫氏は、かつて「学歴はなくてもいいが、学力はなければならない。そこを混同してはならない。」と強調しました。
- ・ 形だけではなく、仕事に発揮できる能力や技能を見に付けていることが重要であるということです。

- ・ いつ学ぼうと、どこで学ぼうと、そこに必要なのは、自分自身の熱意と意志です。
今の自分を向上させたいという熱き意志が、自らの技量を向上させるのです。

・ 今を生きる

- ・ 「あすがある あさってがあると考える間は、なんにもありはしない かんじんの『今』さえないんだから」
- ・ 「今に感謝して、今を味わうのだよ。明日や明後日のことばかりを考えて、今の自分を味わうことをしなかったらダメだよ。」

- ・ 今この瞬間を味わうとは、今この時この場から逃げずに正対することです。
今の連続があって人生が成り立ちます。「この瞬間」を生きましょう。

・ 早く気づいてよかった / ミスを恐る恐る報告 / 上司の「早く気づいてよかったね。」

一緒に行きましょうの一言（入金処理・銀行の窓口担当者の協力）

- ・ 失敗やクレームなどの報告は、口が重くなりがちですが、その停滞の末に大きな事故に至ることがあります。スムーズな報告・連絡・相談（報・連・相）は、どのような組織にも当てはまる活動推進の要です

・ 全身で聴く / 新卒採用者選考の最重要視点「コミュニケーション能力」

- ・ 企業が伸びるためには、コミュニケーションを図り、風通しをよくしなければなりません。伸びない企業は、そのパイプが詰まっているのです。

- ある調査では、

- ・ コミュニケーションに必要なポイントは、話すは22%に対し、聞く63%とされ、「聴く能力」が最も大切とかがえられていることがわかる。
- ・ 一般に「聞く」は耳で「きく」ことで、知ることです。「聴く」は耳と目と心を合わせ、全身で相手の発する情報を「きく」ことだと言えます。
- ・ 仕事の場においては、ただ漫然と聞くのではなく、「よし聴くぞ」と心を決め、全身を耳にして「聴く」ことが大切です。聴くために集中をたかめれば、相手への共感の度合いも増し、うなずきや相槌も自然と出てくるでしょう。

- ・ コミュニケーション能力を高めるために、人に対する時には「聴く」意識を強め、それを話すことにも活かしていきましょう。

・ 伸びる人の共通点 / プロ野球打撃コーチ30年間・七つの球団を渡り歩き、三十人以上のタイトルホルダーを育て上げた伝説の打撃コーチ / 大学の通信課程で心理学を学び・通信教育で5年かかって教員免許を取得・最後の一年は、高校教師として教壇に立ち、甲子園を目指した。（高畠道宏氏）

- 高畠氏が言う「伸びる人の共通点」

- ・ 素直であること 好奇心旺盛であること 忍耐力があり、あきらめないこと 準備を怠らないこと 几帳面であること 気配りできること 夢を持ち、目標を高く設定することができること 以上七つです

- ・ 中でも、素直であることが、伸びる要素の根底になるでしょう。どんな状況下でも「これで良い」と受け切ることで、素直な心が養われるのです。

・ 心の姿勢 / 小笠原流礼法宗家の小笠原敬承斎氏：学校や企業でのビジネスマナー研修で。

- 好ましいコミュニケーションを育むためのポイントとして

- ・ 一つは、「身だしなみや姿勢です。」身だしなみの基本として清潔感を保ち、姿勢を整えることを意識して肩の力を抜き、真っ直ぐに美しく立つようにします。
- ・ 二つ目は、「お辞儀などの基本動作です。」

感謝の気持ちをしっかりと伝えるために、体を戻すまで意識を保ち、相手に感謝と敬意が伝わるように心がけます。

- ・ 三つ目は、「言葉遣いです。」
「さようございますか」を「なるほどですね」などと誤用せず、相手に合わせて美しく正しい敬語を使うことで、好印象を与えます。
- ・ 挨拶や姿勢などの基本動作を身につけるには、普段から意識して取り組むことが、肝要です。

- ・ マナ - とは「心のこもった行動」です。日頃から敬意あふれる姿勢で、人と接していきたいものです。
- ・ 先ず姿勢から / 江戸時代の儒学者・兵法者：山鹿素行「外その威儀正しければ、内その徳正し」
 - ・ 正しい行動をするには、先ずその外観を正しくしなければならないことを意味しています。
 - たとえば
 - ・ 「姿勢が正しくなければ、考え方もまがってくる。」という教えです。
 - ・ 職場でのデスクワ - クで、姿勢が悪いと、よい知恵やアイデアも湧いてきません。
 - そうならないためには、
 - ・ 背筋を伸ばし、腰骨を中心にして身体を立たせることが大切なのです。
 - ただし
 - ・ 姿勢を正しくしようと力んでしまうと、身体を緊張させ、その緊張が筋肉をこわばらせ、疲れさせます。
 - ・ 全身の力を抜いて、心も身体もリラックスさせ、自然体で床にしっかりと両足をつける気持ちで腰掛けます。

- ・ 姿勢を意識して座ることは、集中力を高めることになります。
「姿勢は気力の第一歩」です。
それぞれの業務に合った正しい姿勢で今日の仕事に臨みましょう。
- ・ 為せば成る / 目標に向かって行動しましょう。：江戸時代米沢藩の赤字財政を再建させた上杉鷹山の言葉。
 - ・ 信念をもって実践すれば、何事も達成できるという意味。
 - 挨拶の声が小さいと注意を受けた新入社員・なぜ挨拶練習ばかり繰り返すのだろうと疑問に思っていた。
 - ・ やる気は声質に表れると懸命に伝える先輩の姿勢に押され、その日からトレ - ニングを始め、トレーニングの後には、自然と声が出るようになった自分におどろく
 - 最後に先輩から

- ・ 「仕事をする上で、やれば必ずできるとの思いがたいせつだ。できない理由を考え始めた時点で可能性はなくなってしまう」
- ・ 私たちは<どうすればよいか>と考えを巡らすことがあります。その時、
「為せば成る」とまず行動に移すことで、新たな道を切り拓くことができるのです。
- ・ 決断力
 - ・ 「羽生流・勝利の掟」 / 将棋界初の七冠達成・勝率七割の羽生善治名人
 - <勝つための五カ条>
 - ・ 直感力 長く考えた答えが、正しいとは、限らない。これまでの経験などを基に、直感を最優先する。
 - ・ 大局観 先入観にとらわれず、広い視野で物事を判断する。
 - ・ 見切り力 必要かどうか分からないものは、思い切って捨てる。
 - ・ 忘却力 失敗したら原因を反省するが、その後は切り替える。
 - ・ 裏切らない 自分自身や周囲を裏切っていないか。やれることは、全部やったという自信があれば、胸を張って決断し、期待に応えられる。
 - * 「気づいた時は（が）その事を成し遂げる最高のチャンス。」です。
 - そして、
 - その一瞬にこそ、自身の決断力が、試されることになるでしょう。
 - “ここぞ”という場面で、しっかりと決断できる心を育てていきたいものです。
- ・ 人となるには・・・中国の明代末期に生きた洪自誠「菜根譚」
 - その中で「友と交わるには、すべからく三分の俠氣を帯ぶべし」
 - と延べ、続けて「人となるには、一点の素心を存するを要す」
 - ・ 「俠氣」とは、利害打算を超えて行動する心意気のことであり、昔から弱きを助け強きをくじく任侠道の原点とされてきた。
 - ・ 「三分」とは、ほどほどのバランス感覚でということでしょうか。
 - 友を助けるのは良いのですが、押し付けになってはいけないということです。
 - ・ 「素心」とは、何の偏見を持たず素直に物事を受け入れる純真な心で、真の人となるために大切な要素であり、それが俠氣の元でもあるのでしょうか。
 - * 私たちの社会は、基本的に「ギブアンドテイク」によって成り立っていますが、すべて損得勘定で動くというのも、それは寂しいものです。
 - 困っている人がいても見て見ぬふりをする人が増えていると言われる現代ですが、大いに俠氣の精神を発揮して、ギブの精神に徹していきたいものです。
- ・ 成長分岐点・・・脳科学者の茂木健一郎
 - 脳科学に基づいて
 - 「ギリギリの難しい目標を設定する意義」
 - ・ 「脳が、いちばん喜ぶのは、全力でやってギリギリできるくらいの難しさの

仕事に取り組む場合です。達成できると、脳内でド - パミンという報酬物質が出て脳が喜び、直前にやっていた行動回路が、強化されます。

『強化学習』といって物事が、上達するコツです。」

- また

- ・ 「自分に楽をさせようと思うと成長しないため、ビジネスマンもアスリートであるべき。成功しているビジネスマンは、全力で疾走していった達成できないかというレベルの目標を設定する人が多いようです。」

* 会計上で損益分岐点があるのと同様に、職場で働く私たちには成長分岐点があります。

低い目標では、力を弱めてしまいます。成長分岐点を上回る目標を達成してこそ、「確実な成長」を周囲がみとめ、自分が実感できるのです。

* 目標を掲げたら達成しましょう。何歳になっても人は、成長できるものです。

. 前向きに生きる。

- ・ 私たちの生き方は、百人百様で、受け止め方も同じでは、ありません。

百人いれば、百の考え方や思いがあるからです。

受け止め方をおおよそ二通りに分けると、「人生が楽しい」と思う人と、「苦しい」と思う人になります。

- その二通りの人たちをじっくり観察すると

『人生は楽しい』と思う人は、楽しんで仕事ができるように工夫をし、家族と触れ合い、自分だけでなく皆が楽しめるように努力しています。

逆に

『人生は苦しい』と思う人は、楽しくする努力をしないばかりか、気ままに自分勝手な行動ばかりしているようです。

- ・ 自分の意識とちがうところで、不運にも苦しい目に遭ってしまう場合も有るでしょう。そのような時こそ、なおいっそう、一所懸命に生きていく事が大切なのです。

「自分も周りの人たちも幸せになるように」と考えることです。

* 一日の積み重ねが人生であり、幸も不幸も自分自身が、決定しているのです。

. プロ意識。

- ・ 私たちは、仕事によって報酬を得ています。その道のプロフェッショナルです。「プロとは、自らの職務に専門的な知識・技能を有し、強い自負心・探究心のもと社会的責任を全うすること」

また、企業経営は「問題を解決することの繰り返し」が、経営です。その先には、感動がある。感動が、なければ、自己満足で終わってしまう。そして、感動の先に社会貢献がある。」・・・この土台が、プロ意識です。

- 広く社会で役に立つものでなければ、本当のプロの仕事とは、いえない。

私たちは、自社が存在する意味、自分が、受け持つ仕事の意味を、よく理解する必要あり。そうした理解が、社会的責任の自覚も同時に生んでいく。

* 一人ひとりが、社会的責任を自覚し、仕事のプロに徹することで、人や社会や地域に貢献することが、できると心得ましょう。

. トップとしての行動哲学：「計画を立てた後は、執念で押し進める。」・・土光 敏夫

- ・ いったん計画したものは、万難を排して完成させよ。その中で人間形成が、できる。 計画とは「将来の意思」である。将来への意思は、現在から飛躍し、無理があり、実現不可能に見えるものでなくてはならない。

現在の延長線上にあり、合理的であり、実現可能な計画は、むしろ「予定」とよぶべきだろう。将来への意思としての計画は、本来困難なものなのだ。

困難を受け入れ、困難にいどみ、困難に打ち勝つモチーフを、計画は自らのうちにも、もたねばならない。

計画は、個々人にとっては、自己研鑽の場をつくる高い目標を掲げ、何が何でもやりぬく強烈な意思の力によって、群がる障害に耐え、隘路を乗り越える過程で、真の人間形成が行われる。そして艱難を自らに課し続ける人間のみが、不断の人間の成長を遂げる。

計画とは、結局、自分のものであり、自分のためにある。そのことを各人が自覚したとき、計画は真の力を現す。

- ・ 「やるべきことが決まったならば、執念をもってとことん押しつめよ。問題は、能力の限界ではなく、執念の欠如である。」
- ・ 企業においても個人でも、事を成すには必ず計画を立てます。立てた計画に対しては、「必ずやり遂げる」という強い信念と果敢な努力を続けていくところに、組織も人も脱皮・成長します。

. 「倫理は、実践によって成る。」「実践なき倫理は、雑念に等しい」

- ・ 実践する際に「理屈なしに、無条件に」行う事が、肝要。

「目が覚めたらサッと起きる、気づいたことは、すぐやる、先手で真心の挨拶に徹する、呼ばれたら元気よく「ハイ」と返事する、約束を守る、後始末をキチッとやる、妻（夫）の話を心から聴く。」

* これらは、ごく当たり前のことばかりですが、しかしこれを理屈なしに行った時に、自己革新の道が、開けてきます。

「真に正しい事とは、まず己が救われ、それと一緒に人が救われることでなくては、ならない。」